



TITLE:

人文 第33号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第33号. 人文 1987, 33: 1-41

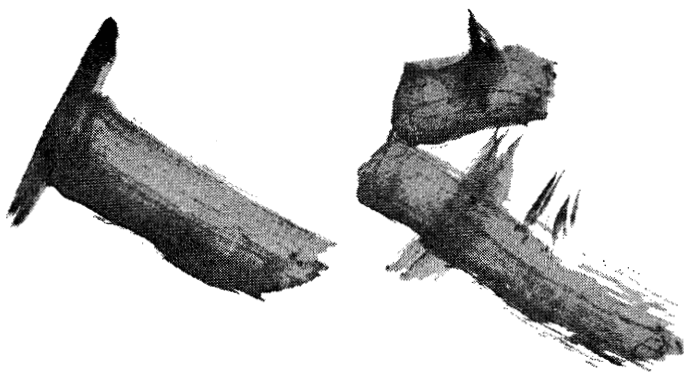
ISSUE DATE:

1987-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57159>

RIGHT:



第三三 号



1987

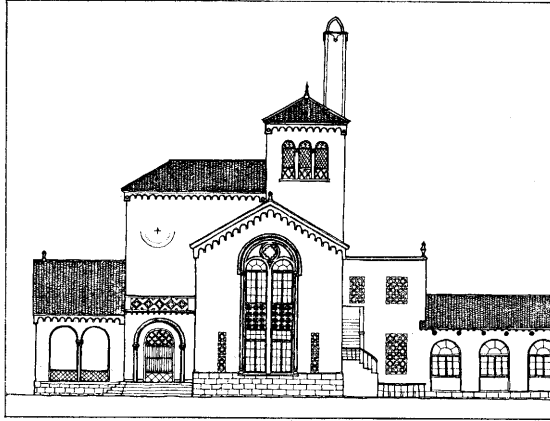
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三号

1985年12月—1986年12月

も く じ



随 想

驢馬の悲鳴

竹内

2

「別の仕方考える」

阪上

孝

観客席から

ブライアン・パウエル

講 演

夏期講座

明治前期の地域社会（奥村）／「政治社会」史という見方について（山室）／清末の青銅器収蔵家たち（浅原）／王羲之の「官奴帖」（吉川）／テクノロジーと文化（浅田）／ヨーロッパの古さと新しさ（中村）

8

開所記念講演

最後のクラシック（井上）／中国庭園の原型（田中）／ボードレールーひとつの詩（多田）

14

退官記念講演

風流、風雅、風狂

柳田

聖山

17

共同研究の話題

共同研究「ボードレール班」に出席して

井上

輝夫

23

清宮と貪官

岩見

宏

モノにいたる中国中世の文物研究班

佐原

康夫

旅

ムザトとウイガン

桑山

正進

「アボリジニーたちと動物園にいった」

細川

弘明

「将軍」牌と Shrap 印

山本

有造

書いたもの一覧

講演会（18）・おくりもの（19）・訃報（19）・人のうごき（19）・外国人客員教官・外国人研修員・招へい外国人学者・外国人共同研究員（21）・東洋学文献センター講習会（22）・お客さま（26）

33

28

驢馬の悲鳴

竹内 実

わたしにとっての中国は、けっきょくは同時代としての中国であった。現代中国論とか国際関係論とかいうと、隙間風が吹きこんでくるようである。

同時代の知識人としての中国の知識人に、ふたたび何度目かの冬が襲いかかるうとしているとき、わたしがふと思いうかべたのは、驢馬の優しい眼であった。わたしはようやく思っていたのであるが、驢馬の啼き声は、馬のように勇ましくなく、悲鳴であって、天まで届け、届くまでは啼きつづけるぞというように啼く、それは、人間の悲しみ、人間として悲しむことのできる人間のために、その人間に代って啼くのであった。

昔、武田泰淳は一兵卒として従軍していたとき、安徽省の田舎から北京の友人に宛てて詩を書いた。「今お前等のあこがれの北京の秋／澄みたるは北京の空だけで／お前等の眼は黄塵に濁ってゐるだらう／黄塵に濁るとは何たる幸福者ぞ／お前等心優しき驢馬よ／忘^{ボキボキ}婦忘^{ボキボキ}婦と啼き／文学の綱に縛られて……」

同時代の中国はつねにうつろい去ってゆくから、人民共和国



になってから北京に住んでも、それは蛇がでていった穴のようなものである。泥濘と人力車夫と物売りと黄塵と、そしてなによりも年代と日付けとそれに相応しい年齢をもちあわせていて、北京ははじめて北京の胸をひろげてくれる。

じっさい、中華民国の軍閥混戦のあいまの平和のなかで、驢馬の啼き声は悲しかった。それは悲鳴としてしか聞えなかったが、少年であつたわたしは、胸をきりさかれるような不安におびえながら、なにを悲しんでいるのか、なぜ悲しいのか、どうして休むことなく天に悲しみを訴えなければならないのか、わからなかった。

瞳はいつもうるんでいて、整った鼻すじや口やつぱった四肢とはべつの生き物であるかのように、話しかけてきたが、解読できなかったのである。

長いあいだ考えてきて、ようやくわかつたのは、人間である悲しみを悲しむことのできる人間に代って啼いているということであつた。人間というのは、驢馬と同じ大地に生まれ育つた人間のことである。驢馬は自分が聡明であることも悲しいのである。

アスファルトの舗装の下に砂利がいっぱい敷いてあるように、現代史がまとめられるためには無数の新聞の切抜きが、貴重な紙屑として存在する。深夜、新聞を切抜くとき、驢馬の労働が徒勞にみえた昔をおもいだす。



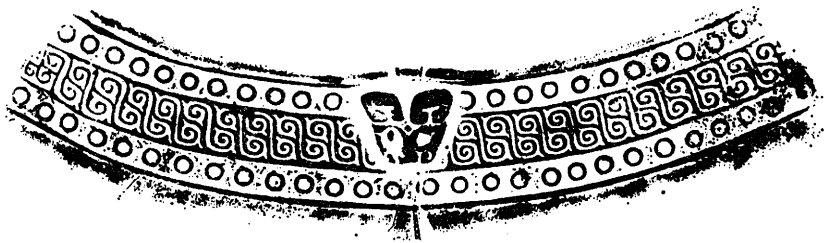
「別の仕方で考える」

阪上孝

数年前から経済学部の大学院生諸君といっしょにミシェル・フーコー『性の歴史』を読んでいるが、その第二巻『快楽の活用』の序論の一節に心を打たれた。

「自分が、いつもとは違う仕方で考えることができるか、いつもの見方とは別の仕方で知覚することができるか、このことを知るといふ問題が、見つづけ、考えつづけるために不可欠であるようなときが、人生にはある。……自分が知っていることを正当化するかわりに、別の方法で考えることが、いかにして、またどこまで可能であるかを知ろうとすることになれば、哲学とは何であろうか。」

『快楽の活用』は、第一巻『知への意志』の刊行から八年を経過して、フーコーの死とほとんど同時に出版された。序論は、このような遅延と、西洋近代のハ性Vの経験を歴史的に考察するという当初の構想を変更して、ギリシャ・ローマの自己統御の術としての



養生術を論じることになったことの理由を述べた文章である。

この八年間は、ドゥルーズがいうように、フーコーの精神的危機だったのだろう。『知への意志』は、権力を、さまざまな次元、さまざまな領域に内在する力関係ととらえたうえで、権力はいたるところに存在するとする権力論を展開した。この主張は権力論の新たな地平を拓くものと思われたが、同時にフーコーを袋小路に追い込んだ。何をいつても、何をしても、結局は権力のネットワークに絡めとられてしまうということになりかねないからである。

この袋小路から抜け出すためにフーコーは、「別の仕方で考え」なければならなかった。そしてその結果が、古代ギリシャにおける自己のありかた、超越的価値や規範への同一化にもとづく近代の主体とは異なった自己のありかたの発見であった。いいかえれば、外的な禁止・命令とは異なった倫理の発見である。

現代のヨーロッパの知識人にとっても、古代ギリシアの哲学が新たな思索の手掛りであることに感慨を覚えるとともに、私たちは「別の仕方で考える」ための手掛りをどこに求めればよいのか、考えさせられた。



観客席から

ブライアン・パウエル

正月に呑みながら随想を書けと「人文」の編者にいわれたものの、東京で正月を迎えている私には京都辺りの地酒が手に入らず、「下らぬ」酒を呑んで京都のことを書くのは如何かと思われまふ。とにかく、東京の冬の青空の下ではれやかな着物姿の美人の新制作座女優に囲まれて（残念ながら真山青果研究所の内で）、蒸し暑かった京都の八月からの思い出を書こうとしますと、どうしても、静かな古都のたたずまい、なだらかな山並み、人文研の方々の御親切といった楽しい思い出のほかに、つらい思い出―自分の研究会での発表、自転車同士で衝突したことなど―も浮かんできます。が、しいて、いままでもっとも印象に残っていることを三つあげてみますと、NHKの朝のドラマ「都の風」、人文研の「一九世紀の文明史」研究会、南座の顔見世がそれであります。大変失礼なことを書いて、申し訳ありません。その三つのあいだに共通点があると書けば、もっと失礼かも知れませんが、たぶんそうだと思われまふ。研究会と「都の風」の共通点をいえば、いろいろな世代、いろいろな立場の人が何かの運命によって一緒になり、あ



る特定の問題に取り組んでいます。竹田屋の人々は社会の変化をどう迎えたらいいか、研究会は一九世紀とはなにぞやと考えなければなりません。竹田屋の市左衛門や悠に研究会の誰が似ているかまで決める勇氣はありませんが、やはりいずれにも外人が二三人出ていますし、いつも迷惑をかけてばかりいます。顔見世と研究会をならべますと、やはりいずれにも芸の行き届いたスターが多いのはもちろん、脇役にも、まことに上手な演者がおります。それに顔見世と祇園との関係にも似て、研究会のメンバーはヴィヨンという美味しいレストランで情熱をこめた議論が続けます。演者と観客との関係も共通していると思われまふ。演劇なら上手に客を泣かせたり笑わせたり、研究会の発表なら聴き手をうならせたり考えこませたりしますと、その関係はスムーズですが、そうでない場合には、案外きびしいものとなります。またこれらの三つにはいずれも序破急があると論じられないこともありませんが、もはや紙幅がゆるしません。ただ、ここでは、日本の伝統的「話し芸」と研究会との関係を指摘しておきましょう。言葉に喜びを得るということは日本の伝統芸能の一つの大きな特徴であるといえますが、じつは人文研の上方弁の飛びかう研究会にも――目的はもちろん違いますが――言葉の選択の面白み、言葉の内容だけではなく、味わい深いものにするための工夫の豊かさという特徴があり、私はいつも感心させられるのです。演劇と討論の一観客として、京都での暮らしは快適と申すにあまりありません。



講演



夏 期 講 座 (昭和六一年度)

六一年八月一～三日
於 本館會議室

明治前期の地域社会

——村寄合から町村会へ——

奥 村 弘

近世と近代の財政運営を比較対照することで、近代地域社会の特質の一端を考える。近世村における村入用の運営は、何か必要があるごとに庄屋の個人的会計から支出され、一年もしくは半年分の総計を村民に割当、徴収するという方法がとられていた（庄屋立替機能）。実態として内部に利害対立があっても、近世の村では農業生産を行う基礎単位として利害が一致して

いることを前提に村運営が行われ、村寄合の際にもしたがって多数決はとられない。この近世村の性格は、領主に対する共同貢租納入責任者Ⅱ村請制によって領主の側からも支えられていた。

この近世村のあり方は明治維新期の激動の中で大きく変化する。第一に廃藩置県の後、全国の入りくんだ領地は三府七二県に整理され、領主の支配の關係で近世において元来一村であったのが合併される。さらに地券発行・地租改正事業による複雑な土地所有關係の整理とあいまって、地理的空間的同一性に基く村域設定および町村合併が進行する。この合併は町村の側から願ひ出る場合と、府県の強力な指導によってなされる場合があった。そして地租改正の終了により貢租の共同納入責任の強制が解かれ、ここに町村は根本的な変化を受ける。地理的範圍が村域の基礎になり、共同納入責任がなくなれば、村が必ずしも共通した利益によって構成できない。商工業者、士族など職能の異なる住民を含みこみ、土地に関しては他村の地主も關係しており、村はこれに対応しなければならぬ。

ここに①予算制度と町村費の前納、②それを審議・議決する町村会、③決定方法としての多数決という仕組みが導入されてくる。①により庄屋↓戸長の家計と村の入費の区別がなされ、戸長の村費の不正が防止され

るとともに、戸長を勤めるものが必ずしも立替をする必要がなくなる。②、③により村内の諸利害の調停が可能となる。

この時期の町村会の諸利害調停機能の特徴は、町村費徴収法に地価割と戸数割の二種類があったことである。地価割は土地に関する支出に、戸数割は住民であることに關する支出とそれぞれ特定の支出と関連づけられ、目的税的性格が強かった。このような税のあり方は納入者が納入した税の使用のされ方を明確に理解できるという特徴を持つ。ここに底辺から租税協議権的発想が生じる事になり、自由民権運動と結び付いて、郡長公選などの地方自治要求を生みだす基礎となる。しかしまた一方で町村内に税納入に基づく秩序を形成する原因ともなっていく。

「政治社会」史という

見方について

山 室 信 一

一見、平明な用語とみえ、しかも当該の学問の最も基本的鍵概念としてそこから様々な理論が演繹されているにもかかわらず、ひとたび厳密な定義を試みるやたちまちパニックに陥り、その学のレーゾン・デート

ルさえ脅かしかねない観念がある。例えば政治学における政治、社会(科)学における社会がそうである。もちろん、それをどう定義しようと事実としての分析対象がある以上、定義そのものとは無関係に認識それ自体は可能だともいえる。しかし、ことはそう簡単ではない。近代の学問の引照枠組がヨーロッパという特定の空間と時間の所産であり、非ヨーロッパ世界ではそれを翻訳して用いることによって、比較というものが可能となったという自明の事実があるからである。

さらにそこに地域的な偏差を時間軸の前後に組み直す進歩史観としての文明史論や発展段階論がおり重なっているために一層事態は厄介となる。つまり、異質の構成原理で機能しているシステムが同一の術語をもって比較され、その差異を示すためにそこに段階差という尺度が用いられるからである。たとえばモルガンの『古代社会』がソキエタスからキヴィタスとして描いた構図は、未開から文明へとシェーマ化され、それがエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』へと受け継がれ、国家論として展開されたのである。

しかしながら、ギリシャ語やラテン語の語義に即して説明したように、これらはとりあえず政治社会という括り方しかできず、こうした概念規定の粗放さが、国民国家論の理解や今日の国家論をめぐる諸々の言

説の混乱を招来しているとも思われるのである。さらに日本の社会科学史をふりかえっても「社会問題」として社会をマイナス側面からみる視座が戦後「近代市民社会」としてプラスに反転させられ、ヨーロッパ型都市社会が近代の指標となり、ムラ共同体をアジア的停滞性や封建制の温床とみる丸山政治学、大塚史学、川島法学を育んだのである。そうした東西対比的見方はM・ウェーバーやJ・R・ヒックスから近代化論にまで及ぶ。むろん、その後の概念史や文化人類学の展開は政治社会の相対化を推進した。しかし、それとシェーレをなして政治・社会哲学は衰退の一途を辿っている。私の課題は、一方で政治社会の歴史性と空間性を視野に入れつつ、そこからあるべき政治、あるべき社会の構成とはいかなるものかを模索するというのはなほだ時代錯誤的であつた非科学的な哲学の復権にある。

清末の青銅器收藏家たち

浅原達郎

中国の古銅器のことを調べるときに、その銅器が、後世、どのコレクターの手をわたってきたかということとは、それほど役に立つ情報ではない。ましてや、そ

の所蔵者がどういう人物であつたかなどという知識は、研究上、ほとんど無益である。しかし、そういう意味のない情報が、研究をすすめていくうちに、知らず知らず蓄積されてくる。ある程度情報がふえてくるとこれは、もうすこし調べてみれば、なにかおもしろいことがあるのではないか、という気がしてくる。そこで、ひまなときに、青銅器とは直接かかわりのない書物にまで手をのばして、資料をあつめることにした。

とはいえ、資料収集の手のおよんだのは、清代の後半、とくに、太平天国・アロー戦争以後の時期であつて、そこで、このようなテーマでの報告となつたのである。

太平天国などの戦乱によって、コレクションが散佚したのと、もうひとつは、たまたまこの時期に重要なコレクターが多くなつたために、いわゆる「同治中興」以後、コレクションの再編がおこなわれる。そして、これ以後のコレクションに、顕著なことは、それが、清流派という一政治派閥を中心として成立してゐたということである。

清流派は、軍隊を掌握する湘軍・淮軍系の洋務派に對抗して、主として科擧の試験を基盤においていた。そこでかれらの学風や趣味が、いわゆる名士たちのあいだに流行する。公羊学や、青銅器収集もそのなかに

ふくまれる金石学が、その例である。清流派は、戊戌政変を最後に消滅するが、金石学は、その残党たちによって、ひきつづいて研究の対象となる。かつて清流の末席をけがしていた端方は、没落した清流たちの所蔵品をとりこんで、清朝最後で最大のコレクションをつくりあげるのである。

もともと、夏季講座での報告を最後に、こういう、あまり役に立たない調べものはやめようと考えていたところが、その後、あるところであれをもう一度しゃべろという話があったりして、ますます興味がわき、いまでは、せつせと、清末最大の収集家・端方の伝記を準備しているしまつである。

王羲之の「官奴帖」

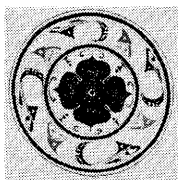
吉 川 忠 夫

「官奴帖」は、「官奴小女玉潤」の文句で始まるためにその名を与えられている王羲之の作品である。官奴とは王羲之の第七子である王献之の愛称。官奴の末娘の玉潤、すなわち王羲之からいえば孫娘が大病にかかった時に書かれた。

玉潤は結局たすからず、しかも王羲之は同時に二人

の孫娘を失ったことが他の作品によって知られるが、ところが「官奴帖」には、「家長」である自分が自己の修養につとめて家族のものを教育することができず、いろいろと「科誠」を犯したために玉潤が大病におちいる結果を招いたのだと述べられており、王羲之の道教徒としてのひたむきな心をうかがうことができる。「家長」とは道教の神につかえる一家の長の意味であり、「科誠」とは道教徒が守るべき戒律にほかならない。また結びに、「上は道徳に負き、下は先生に愧ず」と述べられている「道徳」とは道教徒の聖典であった『老子道德経』の「道」と「徳」であり、「先生」とは道士のことである。

かく「官奴帖」は、道教徒の懺悔告白をその内容とするのであって、それはあくまで「先生」に与えられた尺牘ではあるけれども、『真誥』甄命授篇に収められた上章（神にたいする上奏）の文章、すなわち許玉斧なる人物が兄が病氣になった時、南真なる女神に生命乞いをした文章と共通の基調を認めることができる。



テクノロジーと文化

浅田 彰

テクノロジーと文化は、遠く隔たったもの、どちらかといえば互いに敵対するものと考えられることが多い。だが、いつも本当にそうだったのだろうか。

たとえば十七世紀オランダの例を考えてみよう。ホイヘンス（光の波動説）やレーウエンフック（顕微鏡）の名が示すように、ここでは光学テクノロジーが飛躍的な進歩をあげつつあった。それに関与したのは科学者や技術者だけではない。哲学者スピノザもレンズを磨いた。現代人の目には詩的なニュアンスに富むと映るフェルメールの絵画さえ、カメラ・オブスクラをはじめとする当代最新の光学テクノロジーに多くを負っていたのである。

こうしてみると、十七世紀の光学革命、それによる解像力の飛躍的上昇は、文化の全域にわたる広汎な変化をもたらしたと言うべきだろう。そこで生じたるつばのような状況の中では、科学から芸術にいたるすべてが相互に絡み合いながら変貌しつつあった。それがあるていど鎮静したあとで、一定の解像力の水準に對

応して、明確なものと曖昧なもの、秩序立ったものと混沌としたもの、等々という分極化が生じ、その上に科学と芸術、テクノロジーと文化の二元論が作り上げられる。だが、再び解像力が飛躍的に上昇するとき、そうした布置は崩れ、すべては再び、つばの中に投げられるだろう。

われわれはちょうど今そのような変化に直面しようとしている。端的に言って、十七世紀の光学革命におけるレンズのような役割を、今日の情報革命におけるコンピュータが演じようとしているのだ。それがまたらす解像力（＝計算力）の飛躍的上昇は、科学者や技術者に利用されるばかりか、芸術家に新たな自然像を提示し、哲学者に人間観の組み替えを迫りさえするだろう。講演ではフラクタル幾何学の例をとって、始まりつつあるそのような変化の方向を探ろうとした。

まだまだ未知の部分が多いとはいえ、新しい革命の方向は古い革命のそれとは逆を向いているように思われる。後者が、主体と対象、対象（オリジナル）と像（コピー）の二元論に対応していたとすれば、前者はそれを解体して、主体なき相互変換のネットワークの中を浮遊する、オリジナルなきシミュレーションの宇宙を生み出しつつあるのだ。

これこそポストモダンと言われる傾向の根幹に他な

らない。そこには魅惑もあれば危険もある。いずれにせよ、テクノロジーと文化を別々にとらえたり、前者が後者を破壊するといった図式に固執したりしているのでは、それを考えることはできないだろう。

ヨーロッパの古さと新しさ

中村 賢二郎

ヨーロッパの歴史を研究してきた者として、通常懐かれている観念とは矛盾する事実に出あった経験と、それを通じて考えたことを話したい。

その一つは医薬分業についてである。医薬不分業の日本では、医薬分業は合理的な制度で、近代ヨーロッパの産物と考えられがちであるが、一〇年ほど前、十五世紀のヨーロッパで医薬分業が行われていた事実を示す史料を目にしたことがある。医薬分業はその当時の全ヨーロッパですで行われており、その起源はさらにもう少し時代を遡るようである。なぜヨーロッパでは医薬分業が行われることになったのか。初めはギルドと関係があるのではないかと思っていたが、それは正しくない。医者が聖職者、法律家とともに「自由業」に数えられていたことから考えると、古典を通じ

て学理を研究してきた医者は、薬の調合のような技術的・機械的な仕事で手を汚してはならない、という考え方に起源していたようである。医薬分業、それは肉体労働を蔑視するギリシア以来の労働観、特殊な価値観に由来しているのであって、起源においては合理的と受けとるべきものではない。特殊な文化理念の産物であれば、それはむしろ合理的、非合理的という価値判断を超越したものである。

次に、やはり一〇年余り前、一六世紀の宗教改革時代のドイツの教会規定のなかで、男が二〇才、女が一八才に達しておれば、親の承諾がなくとも結婚することができると規定されているのを読んで、驚いたことがある。これは現代の民法での規定とほとんど隔りのないものといつてよいだろう。しかしこれも個人の権利の伸張などとは無関係に作られた規定であったようである。中世では教会が結婚に大きな発言権をもっていたが、その教会は結婚に関して現実的に対応しており、同棲関係も結婚に準ずるものとして容認していた。宗教改革者は道徳的リグリストとして同棲関係を認めず、結婚はすべて親の承諾を必要とする主張していたが、先の結婚年令に関する規定は、この宗教改革者と中世の方針を継承しようとする現実主義者、保守的な法律家との意見の衝突と妥協の結果として作ら

れたのではないか、と考えられる。

ヨーロッパのことであればすぐ合理的、近代的と受けとりがちな考え方は、改める必要があるのではないか。

開所記念講演（昭和六一年度）

六一年十一月八日
於 本館会議室

最後のクラシック

井 上 章 一

今日、多くのビルディングは、直方体の箱をくみあわせたような形でたてられる。豆腐を切ったようだと評される、四角い形になっている。また、その壁面も縦線と横線の交差によって構成されることになる。鉄とガラスとコンクリートが格子状に編成された、いたって単調な外皮を、街頭に露呈させている。いわゆる、モダニズムのスタイルである。

このスタイルが考案されたのは、両大戦間期のヨーロッパである。この時期、二〇世紀の初頭に噴出した芸術上の前衛的な諸潮流が、たがいにからまりあいながら、まったく新しい建築の形式をうみだした。

キュービズム、表現主義、構成主義、未来派などのところみが、一九二〇年代になって機能主義の建築理論へと結実する。その結果、伝統的な古典主義の建築は、雲散霧消することとなった。そして、それにかわって、直方体のビルが、建築界を席巻していくようになっていく。

もちろん、事態は日本でも同じである。ここでも、一九三〇年代になると、モダニズムのビルがたちだした。第二次世界大戦後には、すっかりそれが定着する。古典様式は、まったくなくなってしまった。

建築史研究の場でも、この変化はひとつのハイライトになっている。古典主義からモダニズムへの劇的な変化は、近代建築史の叙述にあたっては、つねにスポットをあびてきた。ただ、そうした叙述も、多くはモダニズムの立場から書かれている。この前衛様式は、いかにして旧様式を駆逐し、勝利者となってきたかといった叙述が一般的である。

そこで、今回は、長野宇平治という建築家に着目してみることにした。一九三〇年代になってもなお、古典様式に固執した、反動の牙城ともよぶべき建築家である。彼に焦点をあてることにより、ひとつの伝統がデカダンスの最終段階において、どのような展開を見せたかといったことを考えてみた。つまり、あえて敗

者の立場にたつことにより、この変革期をながめてみたのである。

長野は、晩年に、大倉精神文化研究所の設計をてがけている。そして、そこには古典主義が解体の極にたつた造形が読みとれる。臆断にすぎるが、これを見ていると、一八世紀後半のヨーロッパのヴィジオネールたちのことがほうふつとされてくる。彼らもまた、様式が喪失した状態におかれていたわけだが、長野もまた彼らとある種の基盤を、いや基盤の不在を共有していたように思えてならない。

中国庭園の原型

田 中 淡

中国の庭園は江南地方に集中している。宋元時代の創建にかかるものもあるが、現在の遺構はいずれも清代中期以降までに度重なる改造、拡張が加えられており、創建当初はおろか明代以前の面貌を伝えるものは皆無にちかい。にもかかわらず、従来もっぱらこれら奇石や山洞を頻用した最晩期の実例と、明末―清代の造園論とによって中国庭園のイメージが形成されている嫌いがある。しかし、文献史料により初期の庭園を

みてゆくと、現存遺構の風格とはかなり隔たりがあったようだ。

中国の庭園は一般に、苑囿と称する皇帝直轄の大規模自然庭園と、貴族、官僚、富商らの邸宅、別荘に付設された私邸庭園とに大別できる。両者にはその社会経済的背景、機能用途、構成要素、そしてとりわけ面積規模において決定的な差異がある。古代庭園の先行原型は、殷代以来の伝統を引く王の狩猟儀礼の場としての苑囿に求められるが、具体的に人工造園の形跡が確認できる最古の庭園は秦始皇帝の咸陽蘭池宮であり、池を穿って、蓬萊山を象った築山の中島が築かれた。

漢代以降になると王侯貴族の私邸庭園造営の記載が現われ、前漢長安の梁孝王劉武の兔園では、雁池という池に鶴洲、鳧渚、すなわち水鳥のかたちに擬えたりしい駁岸がつくられ、また後漢洛陽の袁広漢の園では「沙を積みて洲渚を為[？]」ったとあり、これらの庭園の風格はむしろ平安時代寝殿造系庭園にちかいものであったと想像される。南北朝時代の私邸庭園でも、「自然の若き」景観への志向がつよくみられる。太湖石峰山洞迷路のような複雑な要素は、唐代以前には顕著ではなかったようである。

一方、後世の造園に典型的な手法のいくつかは、比較的早い時期にすでにその原型が見いだされる。土、

石の假山（築山^{つくやま}）は秦漢時代、山洞もおそくとも梁代には遡る。ただ、奇石を独立させる「石峰」は、假山とは本来異質の系統とみられ、梁代に巨石を置いた例があるが、顕著になるのは唐代で、白居易は太湖「石を甲とする愛石の順位をのべている。また、後世には普遍的でなくなる池の中島は、初期には東海神山を象った景物として定型化していたようだ。名勝の景観模写は後漢にすでにみられ、「小中に大を見る」中国庭園特有の縮景、および『園冶』の「遠借」に相当する借景の手法は、ともに北宋には明瞭なかたちで出現しており、これらは屈曲による空間奥行の演出、円窓による框景などと同様に、明清時代の造園に典型的な手法として定着する以前の先駆をなすものである。

ボードレールひとつの詩

多田 道太郎

「悪の花」に「美への讃歌」（二一）という詩がある。この詩ただひとつをゆっくり、ふかく読みこもう。ひとつの詩の読解から広大な世界への展望を切りひらこう。

「美」（二七）では美（あるいは美女）は彫像のよう

に冷やかであったが、「美への讃歌」では「美」は気配のように現われ、しだいに「美女」という物の怪に転じてゆく。能のように劇の進行と共に心の深層をあらわにしてゆく。美は「深い天」から来たのか、または「深淵」から浮かび出たのか。天にせよ深淵にせよ、遠いところからの *evocation* であった。召命された美はシテとして美女の衣裳をまとい、通俗のワルツを踊りキッチュの本性をあらわす。

第四連は *danse amoureuse* という六音節で閉じられている。α音で両端を締め、中にはu音、φ音がおかれている。ワルツの二つの三拍子で、この詩の前半の二項対立の踊りは閉じられている。神か悪魔か、相反する二つの傾向が詩人の心内でひしめいていたが、その二項対立はワルツという俗悪の踊りで一おうの終止符を打たれる。十八世紀の終りころライン河をこえてフランスに侵入してきたワルツは、ダンス大衆化の波にのって、一八三〇年ごろの流行の波頭に乗る。ワルツにおいて一対の男女が小さな輪をつくり、小輪たちはブルジョア社会というホール一杯に大きな輪を描く。市民社会の理想型を詩人はキッチュの光りのもとにあげたのである。

pareillant（欲望に喘ぐ、死に瀕す）はエロス+タナトスの状況を一語で示し、示すことで死に救済をもと

める哀れな男を、根底から嘲ける。タナトスの物象「墓」にいたって、あらゆる抗弁は無効となる。

「美への讃歌」は「美」にくらべて、より少なく芸術的であり、より少なく美的である。人生の、世俗の要素がまぎれこみ、キツチュの踊りをおどる。犬の仮面をかぶって登場したツレはかげろうに変身し、そして炎に変身したシテ美女の懷ろにとびこみ、焼け死ぬのである。しかし死という身のあかしも何の役にたたぬ。

Qu'importe! (どうなとなれ) という鼓の音に促がされ、ツレは美女のあとを追う。橋がかりには「リズム」と「香り」と「淡い光」とが残んの香としてただよう。観念や文化の重層性を一気に落下してゆく物の怪の気配が、「美への讃歌」の現代に与える衝撃である。



退官記念講演

六一年三月二〇日
於 本館会議室

風流、風雅、風狂

柳 田 聖 山

一休の狂雲集は、風流という言葉をも、百五十回も使う。現在知られる漢詩は一千六十首、大半が七絶であるから、総字数は約三万、漢字の種類は三千余りゆえ、一字平均十回強となる。風流の百五十回は、正しく異例中の異例である。風流に限らず、風雅、風狂、風韻など、風のつく他の用例をあわせると、四百五十回以上となる。風という文字に、一休は特殊の感情を寄せるので、それがこの人独自の色好みの表現ともなる。

いったい、風流の感情くらい、その正体の把みにくい、模倣たる表現はないだろう。それが日本人の美意識の、重要な要素であることは、九鬼周造や岡崎義恵の説くとおりである。風流は現代語としても通用するが、中国では長い歴史をもつ、古典詩語の一つである。できることなら、自分なりの手締めがほしい。わたくしは数年来、そんな野望にとりつかれて、あれこれと

考えるうち、風流は必ずしも一休に限らず、広く禅仏教を貫く、中国思想史の要素であること、とりわけ贅沢で貪婪な胃の腑なしに、容易に味わえぬ高貴さに気付く。曾つて恩師久松真一先生は、不均斉、簡素、自然、枯高、脱俗、静寂、幽玄の七つを、禅仏教のドミナントとされたが、さらにもう一つの風流を加えてよい。風流は七つにならぶ第八というより、七つを覆う根元的な何かのようだ。一休とは最も遠い道元に、すでに風流の好みがあつて、道元はその出処を先師如淨におく。

言つてみれば、風流は禅仏教最奥の一著子だ。これ Avoiding, 中国思想を語ることはできぬ。風流は一種の形而上学で、風雅は文学で、その意識化、風狂は政治実践である。風雅は明らかに詩の大序に出て、芭蕉

の夏炉冬扇にくる。風狂は曾哲の詠帰より、一休の色好みに及ぶ。風流は地水火風という、インドの自然哲学に発源して、誰が風を見たでしょう、あなたもボクも見はしない、けれども木立が揺れるとき、風は通りすぎてゆく(Cロセッティ)近代まで拡がる。風は流れ過ぎる、形而上の愛情なのだ。

禅仏教のおもしろさは、風流を通り抜けて不風流にくることだ。不風流の発見は、北宋の白雲が、臨済の悟りを頌するのに始まる(吟嚙集にある話は、後代のものである)。ぜいたくとは、そのことである。「有漏地より無漏地に過ぎる一休み」の歌の如きも、わたくしは逆の方向に、無漏より有漏に過ぐるのが、禅本来の面目だろうと思う。

講演会

。一九八六年四月二三日 於 分館会議室

一九三〇年代の中国文学の特色

馬良春

七月派の詩人たち

呉子敏

學術講演会

四月二二日午後二時 於 經濟研究所第

一共同研究室

科学の発展と言語の変革

マサチュセツ工科大学教授

トーマス・クーン

共催 人文・経済研

中国社会科学院代表団講演会

。六月六日 於 本館二階大会議室

中国の學術研究体制について

狭間 直樹

中国における日本研究の現状

中国社会科学院
日本研究所々長

方

紹介・挨拶

中国社会科学院院長

胡

『中国社会科学』

副編集長 徐宗勉

哲学研究所自然弁証法研究室

主任 邱仁宗

〃 院長秘書 白 小 麦
〃 外事局アジアアフリカ処 副処長 李 薇

。九月二四日 於 本館二階大会議室
歴史記述の方法について——自著を中心——

ボローニヤ大学
カルロ・ギンツブルグ教授

おくりもの

。一九八五年度の財団法人、人文科学研究
協会助成金は、柳田教授の推薦により、
亀山卓郎氏（白隠禪師の画を読む）に對
して）におくられた。

（一九八六年三月二〇日 於本館応接室、
出席者 柳田所長）。

。井上章一助手は財団法人サントリー文化
財団より、一九八六年度サントリー学芸
賞が芸術・文学部門で、「つくられた桂
離宮神話」（弘文堂）の著作を中心とし
た活動で、受賞した（一二月七日付）。

訃 報

。倉田淳之助名誉所員（八四歳）は、四月
一日御逝去されました。

人のうごき

。柳田聖山教授（東方面部）は停年退官（一
九八六年三月三十一日付）、京都大学名誉
教授に（四月一日付）。

。竹内 実教授（東方面部）は、当研究所所
長に併任、附属東洋学文献センター長を
併任（四月一日付）。

。奥村 弘氏を助手（日本部）に採用（四
月一日付）。

。新井晋司、佐原康夫両氏を助手（東方面部）
に採用（四月一日付）。

。山室信一助教授（東北大学文学部附属日
本文化研究施設）を当研究所助教授（日
本部）に配置換（四月一日付）。

。須羽治夫事務長は文学部に配置換。長谷
川 心防災研究所総務課長を当研究所事
務長に配置換（四月一日付）

。井波陵一助手（附属東洋学文献センター）

は、滋賀大学教育学部講師に昇任（四月
一〇日付）。

。岩見 宏神戸大学文学部教授は、当研究
所教授（比較文化研究部門）に併任（四
月一日付）。

。井上輝夫慶応義塾大学経済学部助教授は、
非常勤講師（比較文化研究部門）（四月
一日）。

。桑山正進助教授（東方面部）は、教授に昇
任（一一月一日付）。

。山本有造助教授（日本部）は、一九八六
年一月五日成田発、スタンフォード大学
フーパー研究所で、張公権文書の調査及
び資料収集を終え、同月二四日帰国。

。富永茂樹助教授（西洋部）は、三月一日
成田発、パリ市内、ヘルシキ市内、ス
トックホルム市内で環境教育についての
実態調査、フランス国立国会図書館で資
料収集を終え、四月五日帰国。

。林 巳奈夫教授（東方面部）は、四月一日
伊丹発、カナダの王立オンタリオ美術館
ハーバード大学、フォゲ博物館等で中国
青銅器時代遺物の研究を終え、五月一一
日帰国。

。杉山正明助手（東方面部）は、五月二四日

伊丹発、内蒙古大学蒙古史研究所、ハイデルベルク大学、パリ国立図書館、大英博物館、ペンシルヴァニア大学等で、モンゴル帝国史に関する学術交流をし、一九八七年三月一四日帰国予定。

。山田慶児教授（東方面）は、六月九日伊丹発、中国上海近郊の馬鞍山市において、上海国際問題研究所と総合研究開発機構と合同シンポジウム「アジア・太平洋地域の発展と二一世紀に向う日中関係」に出席し、同一八日帰国。

。浅田 彰助手（西洋部）は、六月一日伊丹発、オーストリア国宮放送リントツ放送局で「コンピュータ文化」シンポジウムにおける講演、パリ第八大学、ヴェネツィア大学で研究資料収集を終え、七月三日帰国。

。宇佐美 斉助教授（西洋部）は、七月九日伊丹発、パリ第七大学、国立図書館、ジャック・ドゥーセ文庫等でフランス近代詩研究のための調査及び資料収集を終え、八月二七日帰国。

。岩熊幸男助手（東方面）は、七月一日伊丹発、パリ国立図書館、ドイツ連邦共和国バイエルン州立図書館等で、中世論

理学、とくに一二世紀ボルフイリオスの「イサゴゲー」に関する未刊写本の校閲・研究・資料収集を終え、九月一日帰国。

。山本有造助教授（日本部）は、八月一〇日チチハル市の齊齊哈爾師範学院で、中日関係史第五次学術研究会に出席し、吉林省社会科学院、遼寧大学等で資料収集を終え、八月二六日帰国。

。甚野尚志助手（西洋部）は、ハーバード・エンチン研究所の客員研究員として、八月二日伊丹発、同研究所、ケンブリッジ大学図書館、ハノーファー大学図書館で、西洋中世史とくに中世社会史に関する研究をし、一九八七年八月二〇日帰国予定。

。前川和也助教授（西洋部）は、国際研究集会派遣研究員として八月二三日伊丹発、スイス国ベルン市において開催される第九回国際経済史学会古代中東部会において「ウル第三王朝時代における食料支給、賃金及び経済トレンド」の報告、大英博物館で古代オリエント経済史に関する資料を収集し、九月一日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、八月三〇日成

田発、連合王国のサウサンプトン大学で世界考古学会議に出席し、九月七日帰国。

。桑山正進助教授（東方面）は、九月二七日伊丹発、中国社会科学院、唐代寺院址、石窟寺院、カシュガルの城址等で新疆地方における仏寺遺跡研究調査を終え、一月一三日帰国。

。曾布川 寛助教授（東方面）は、九月三〇日伊丹発、徐州市博物館、九龍山漢墓、益都博物館等で中国美術の調査、資料収集を終え、一〇月二〇日帰国。

。竹内 実教授（東方面）は、一〇月二〇日成田発、中国社会科学院文学研究所の招請で芙蓉賓館で行なわれた「魯迅と中外文化」学術討論会で報告、討論を終え、同月三〇日帰国。

。狭間直樹教授（東方面）は、十一月二〇日伊丹発、中山大學、孫中山記念堂で孫中山研究国際学術討論会に参加し、同月一五日帰国。

。浅田 彰助手（西洋部）は、一二月九日伊丹発、フランス国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センターに於いて日本文化シンポジウムで講演を終え、同月一八日帰国。

外国人客員教官

(比較社会客員部門)

- Notcheler, Fred カリフォルニア大学
歴史学部教授

明治初期の知識人たちの研究

受入教官 飛鳥井教授

期間 一九八六年三月七日～一九八六

年十二月三十一日

(日本学客員部門)

- Blacker, Carmen ケンブリッジ大学東
洋学部上級講師

南方熊楠とイギリス

期間 一九八六年二月一日～同年五月

三十一日

- Powell, Brian オックスフォード大学東
洋学部講師

近代京都南座史の研究

受入教官 古屋教授

期間 一九八六年八月一日～一九八

七年四月三〇日

外国人研修員

- Pincus, Leslie シカゴ大学院生

九鬼周造における美術形式および文化
の意義に関する思想史的研究

指導教官 飛鳥井教授

期間 一九八六年二月一日～一九八七

年一月三十一日

- Sharf, Robert トロント大学院生

初期禅宗の思想 指導教官 吉川教授

期間 一九八六年四月一日～一九八七

- Falkenhausen, Lothar A. ハーバード大
学助手

中国周時代(青銅時代末期)の考古学

指導教官 林 教授

期間 一九八六年四月一日～同年九月

三〇日

- Evelyn, Mesnil パリ第七大学院生

蜀国宗教絵画の研究

指導教官 荒井教授

期間 一九八六年四月一日～一九八七

年三月三十一日

- Russell, Terance C. オーストラリア国

立大学院生

中国の道教と詩歌の關係

指導教官 麥谷助教授

期間 一九八六年四月一日～同年八月

二〇日

- Magnus, Kriegskorte ボン大学院生

近代日中交渉史 指導教官 狭間教授

期間 一九八六年四月九日～一九八七

年三月三十一日

- Sawada, Janine ロンビニア大学哲学博
士候補生

一八世紀における信仰生活と倫理教育

指導教官 横山助教授

期間 一九八六年九月一日～一九八七

年八月三十一日

招へい外国人学者

- Boot, Willem Jan ライデン大学教授

徳川家康の神格化をめぐる諸問題

受入教官 横山助教授

期間 一九八六年一月一日～同年八月

三十一日

- 趙政男 高麗大学教授

社会主義圏の政治思想と政策に関する

研究 受入教官 樋口教授

期間 一九八六年三月一日～一九八七年二月二八日

。Smith, Bardwell L. カールトンカレッジ教授

水子供養の実態調査並びに歴史研究

受入教官 横山助教

期間 一九八六年九月一日～一九八七年六月三〇日

。Chaffee, John Y. ヲーク州立大学助教授

宋代政治制度の研究

受入教官 梅原教授

期間 一九八六年九月一日～一九八七年八月三一日

。陳俊民 陝西師範大学副学長

日本における中国思想史研究の歴史と現状 受入教官 吉川教授

期間 一九八六年十一月一日～一九八七年一月三一日

。江藍生 中国社会科学院言語研究所助理研究員

言語史と近代漢語文献の研究

受入教官 尾崎教授

期間 一九八六年十二月一日～一九八七年十二月一六日

東洋学文献センター講習会

。一九八六年度 漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第一日（九月八日）

漢字のデータベース（講演）（京大大型計算機センター教授） 星野 聡

東洋学文献類目の編纂とフォーマット（講義）（京大東南アジア研究センター助手） 紫山 守

第二日（九月九日）

東洋学文献類目の計算機処理（一）（京大大型計算機センター技官） 村尾義和、河野 典

東洋学文献類目の計算機処理（二）（京大大型計算機センター技官） 桶谷猪久夫

第三日（九月一〇日）

計算機入門（講義）（京大大型計算機センター助教） 島崎 真昭

第四日（九月一一日）

情報検索（講義）（京大大型計算機センター助手） 渡辺 豊英

コンピュータ・ネットワーク（講義）（京大大型計算機センター講師） 飯田 記子

計算機の入出力（講義）（京大大型計算機センター助手） 金沢 正憲

第五日（九月一二日）

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化（講義） 勝村 哲也

質疑応答

。一九八六年度 漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十一月一七日）

漢籍（講義） 尾崎雄二郎

四部分類（講義）（滋賀大学講師） 井波 陵一

第二日（十一月一八日）

目録法（Ⅰ）（講義） 田中 久子

参考書誌解題（講義） 沼沢 博

実習

第三日（十一月一九日）

目録法（Ⅱ）（講義） 田中 久子

実習

第四日（十一月二〇日）

地誌（講義） 井上 進

実習

第五日（十一月二一日）

新学書（講義） 江田 憲治

実習

第六日（十一月二二日）

質疑応答

共同研究「ボード

レール班」に出席して

多田道太郎先生から京大人文研ボードレール班にお招きいただいたから早いもので、二年目が終わろうとしている。私学育ちの私にとって国立大学の様子を知ること、共同研究に参加することも、何から何まで新鮮な経験で、思いがけない僥倖を与えて下さった多田先生にまず感謝申しあげたい。

所で私が京都に通いはじめた頃、「悪の花」注釈の作業は最終段階に入っていた。多田先生から前もって、主として詩篇の音韻や文献的側面について率直な意見を出してほしい旨伝えられていたが、十年以上にわたる各メンバーの研鑽と読みに接してゆくと、やはり確固とした形があり、まずそれを私なりに追ってゆくことだけでも容易ならぬことだった。各々の執筆者が今迄の代表的な注釈を踏まえ、新しい観点を打ちだそうとする手続きには個性があり、それを充分味読しさらに何か意見を言うためには、私にとって今後長い年月にわたる仕事が必要となるだろう。そんなわけで何ひとつ貢献できないまま、むしろボードレール班で

の検討や出版された「悪の花」注釈によって、私の方が大きな刺激を受けたのだった。世界にも類例をみない共同執筆による注釈を前にした世のボードレリアンも、また同じように感じたにちがいない。

こうした刺激のうちで私が強く印象づけられたのは、非西欧文化圏に住む私達の感性や精神の動き方とどう考えるかという点であった。ここに日本人のフランス文学解釈の独創が生まれる余地が、外側の眼として存在する。しかし同時に許容度の問題もでてくるはずだ。この点で各執筆者の方法は一樣ではないのだが、私をある拘束からとき放つ自由を感じたのは事実であった。それだけ執筆陣が多士済々であり、裾野の広い教養の持ち主の集まりであったということが大きい。そして多田先生の共同研究を深めてゆく執念と叱咤激励ぶりには、各執筆者の個性をひきだすみごとなお座婆さんぶりが見え、打ち上げ会で落涙された先生の姿には感動を誘われたのだった。こうした忌憚のない議論がかわされる貴重な場に参加させていただいた機会に、現在進行中のボードレール研究には何となくひとつの石をつむことができないかと云うのが、私の切なる願いとなっている。二年目にして京都の街にも随分親しくなり、不粋な東の人も「おおきに」と舌にころがり出るようになったのも、個人的には何となく嬉しいことで

もある。

(井上 輝夫)

清官と貪官

——明清時代の国家と社会班——

官僚が所定の給与によって生活を維持するのは、現代ではあたりまえのことと考えられ、もし地位や職権を利用して別途の収入を得るならば、それは汚職ということになる。しかし王朝時代の中国では、その関係は簡単ではない。清代には、「三年間清廉な村知事として勤めたら、十万両の銀子が残る」という意味の諺がある。十万両といえば、今の数億にもなる金額で、正規の給与を全部残して貯めこんでもおつかない。ということ、清廉と見られる者でも、法定外に大きな収入を得ていたということである。それは官界において下から上へと流れるヤミ給与の体系ができていたからで、かつて安部健夫教授が康熙時代を中心にして解明されたところである。その流れは全く慣例化していて、個々の官僚がこれを汚職と意識するようなことは、まずなかったであろう。収入がこの慣例化した範囲にとどまるならば、彼は清官とよばれる資格があっ

たものと考えられる。

このようなヤミ給与の体系は、多少形は違ったかも知れないが、明代の後期にはすでに確立していたようである。清官として知られる海瑞は、一六世紀半ばに県知事を勤めた時のことを、詳しく書き残している。それによると、知事は常例という名で十数項目にわたる収入を得ており、合計すれば正規の給与の十倍を越えている。補佐官や下僚にも、それぞれ地位に応じた常例があった。海瑞はそれを全廃したということであるが、常例というからには受け取るのが当然であり、受け取ったからとて貪官とは見なされなかったであろう。全廃というのも、海瑞在任中だけのことだったと想像される。

このように明清時代の官僚の給与は、表裏二重の体系を持っていたと見ることができ、このような二重性は他にもいくつか見出される。たとえば官僚制といえど科挙出身の高級官僚が問題とされることが多いが、科挙とは無縁の下級事務員たる胥吏の存在をぬきにしては、全体としての官僚制を理解することはできない。また財政については、中央集権国家であるからすべてが国家財政であると思うと少し違っている。実際には中央政府の十分把握していない地方財政的なものが存在する。いずれにしても、上層と下層、あるい

は表面と裏面に別々のものがあって、それが一つの全体を構成しているのである。一種の二重構造といつてよいであろう。このような構造は、恐らく宋代以来の中央集権制に共通するものかと思われ、中国的な王朝国家の性格を考える上で、一つの鍵になるかも知れない。この班はあと一年の期間を残すだけとなった。右のようなことも念頭に置きながら、研究をどうまとめて行くかを考えているところである。(岩見 宏)

モノノにいたる

——中国中世の文物研究班——

本年度から五年間の予定で発足したこの研究班のテーマは「モノノ」を使った研究という一点にある。具体的には中国で出ている雑誌『文物』や『考古』などに載った考古学的資料を中心に、伝世品も含めて幅広く扱ってみよう、という主旨である。この「幅」には、石刻・絵画・器物や明器といった種類のも様性に加えて、時間的な幅の広さが含まれる。中国史上いつからいつまでを「中世」と見なすかはそれ自体議論的だが、この研究班ではこれを大まかに秦漢から六朝・隋

唐、五代あたりまでとしている。そもそも「中世」は「まん中の時代」であるのだから、それ以前と以後の両方に常にかかわらざるを得ないのである。

さて、中国中世史の研究は正史を始めとする文献史料を読むことに始まる。これらの文献、特に正史は、いずれも徹底して上からの「正統」的視点で編纂された、いわば天かける鳳凰の目で眺められた歴史である。地上の具体的なドタバタは——これが一番知りたいのだが——一視同仁、霞がかかってしまうことになる。

しかも困ったことに、日常的な、当時はあたりまえだったことがひどく分りにくいというおまげがつく。特殊具体性のかたまりともいえる様々な文物を資料として用いることには、この文献史料の二重苦を多少なりともやわらげる期待がかかっているのである。

ところが、「モノノ」の持つ特殊具体性そのものが曲者である。類例を集めて比較してみても、特殊な部分は依然として解釈を拒み続ける。といってもあまり高級な悩みではない。肝腎な所で字が欠けている、字は読めるのだが意味がよくわからない、そもそも図版がよく見えない、等々。実はこのテンヤワンヤの作業が何を産み出すか、これもやってみないとわからないこともあろう。「モノノ」に取り組むのは面白い、しかし気の長い仕事である。

この研究班には研究所の内外から三〇名近い班員の参加を得た。それぞれ文史哲の専家、豪華な顔ぶれである。初年度は礪波護班長を始め十数名の班員が各々のテーマで発表を行い、実に多様な「モノ」が登場し

た。中国留学や旅行の報告もあり、「文物」の中には人物や風物まで入れられそうな勢いである。二年目以後この研究班の活動はどこまで広がるか。「モノ」にいたる道は多端にして遠い。(佐原 康夫)

お客さま

一九八六年一月一八日

中国社会科学院研究生院教育考察団
中国社会科学院研究生院副秘書長
中国社会科学院研究生院院長・教授
中国社会科学院研究生院講師
中国社会科学院研究生院副教務長・講師

孫 耕夫
溫 濟澤
沈 才彬
趙 光遠

六月三日
中国科学院自然科学史研究所教授
六月六日
中国社会科学院訪日考察団
中国社会科学院院長
中国社会科学院日本研究所所長
中国社会科学院『中国社会科学』副編集長
中国社会科学院哲学研究所自然弁証法研究室主任

李 存光
張 馭寰

二月四日
中国社会科学院近代史研究所副研究員

尚 明軒

四月二三日

中国社会科学院文学研究所考察団
中国社会科学院文学研究所副所長
中国社会科学院文学研究所研究員
中国社会科学院文学研究所副研究員
中国社会科学院文学研究所文芸新学科研究室副主任

馬 良春
濮 良沛
吳 子敏
程 広林

中国社会科学院院長秘書
中国社会科学院外事局アジア・アフリカ処副処長
六月一四日
東北民族学院副院長
六月一七日
復旦大学副教授

李 薇
閔 捷
樊 樹志

六月二四日

復旦大学教授・中国日本史学会副会長

吳傑

八月二八日

フランス国立東方語言学院教授

Marie-Claire Bergère

七月一八日

北京魯迅博物館代表団

北京魯迅博物館長

潘德延

九月一三日

ニューヨーク公共図書館東洋部長

John M. Lundquist

九月一五日

中国戲劇家協会副主席

張庚

中国評劇院副院長

張璋

一〇月七日

台灣東海大学教授

張勝彦

一〇月九日

北京大學校務委员会主任

王学珍

一〇月一五日

中国中日關係史研究会青年会員代表団

中国中日關係史研究会接待部主任

中国中日關係史研究会弁公室副主任

中国中日關係史研究会弁公室副主任

中国中日關係史研究会会員

中国中日關係史研究会会員

一〇月一七日

吉林大学教授

金峰玉

一〇月二九日

中国社会科学院日本研究者代表団 座談会

天津社会科学院日本研究所副所長

中国社会科学院日本研究所政治研究室副主任

湖北省社会科学院国民經濟研究所助理研究員

陝西省社会科学院助理研究員

黑龍江省社会科学院歷史研究所副所長

上海社会科学院部門經濟研究所助理研究員

中国社会科学院外事局並非処副処長

中国社会科学院外国文学研究所助理研究員

浙江省社会科学院助理研究員

一〇月二日

清華大学建築系副教授

一〇月三〇日

北京大學歷史系副教授

一〇月一九日

ソ連科学アカデミー米國カナダ研究所副所長

一〇月一五日

中国社会科学院語言研究所長

一〇月一二日

上海師範大学教授・文学研究所長

一〇月二五日

中国社会科学院近代史研究所副所長

一〇月二九日

李宗一

盛繼勤

宋益民

殷冰俠

張保通

步平

朱金海

李薇

蘭明

王永太

郭黛姪

王曉秋

劉堅

孫遜

Andrei A. Kokoshin

張斌

魏加寧

石軍

汪靖

張秀英

張秀英

張秀英

張秀英

張秀英

旅

ムザトとウイガン

桑 山 正 進

いくら本をよんでも頭にはいろいろなことがある。実地実物をおもとにしている者にとり、遺跡の自然環境を他人が書いたものからよみとって頭に入れようとするとは、いかに立つことはない。既知のことから類推することも可能かもしれない。だが東トルキスタンに事が及ぶや、私にはそれとて不可能であったから、こんどのタクラカン南北行はなにかと得るところが多かった。

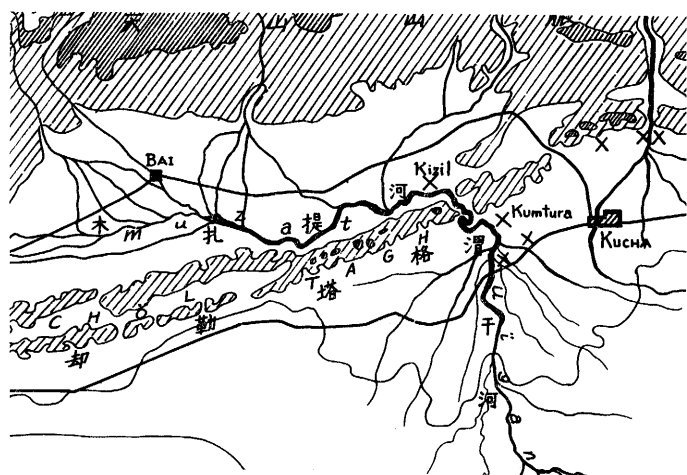
クチャ周辺のことそのひとつである。クチャの北にチュルターグがつらなっていて、そのむこうにバーイーのオアシスを擁する大盆地があり、そのまた北に天山があるうとは、行っではじめて実感するのである。クチャが天山すぐの麓ではなく、さして高くはないこの連山の、しかもかなり南にあるという事実、この連山を切ってバーイーの盆地からなってくる一河ぞいに、キジルと

クムトラという名にしおう石窟が、山をはさんで北と南とにあるという事実。私には今まで判然としていなかったのである。それとともに、この一河にまつわる不可思議もはつきりしてきたようにおもふ。

というのは、わが中央アジア美術の専門家と称されるひとたちが、キジル千仏洞を言うとき、かならずふれるムザルトあるいは「ムザルト（渭干）」河のことである。たしかに石窟を詳報した二人のアルベルトは *Muzart* と記している。ところがこんど、文物管理処のムハンマド・ムサ氏は、何と聴いてもムザトとよぶ。r音がなく、この土地の言語でr音がh音のようにまさか消えるとも思えず、やはり現地の呼称はムザトなのであり、地図上は木扎提と記されるのである。

ドイツ人たちは、わざわざrをつけることによって、ドイツ語地名に非らざるこの河名がムザルトと読まれることを防いだのにちがいない。そう書かれたドイツ語による大部の遺跡報告のみに拠るしかすべのなかったわが国人は、ドイツ語を日本語に写す場合と同じように、r音を律義に書きうつし、ムザルトとした。本来のムザトが *Muzart* と写され、更にムザルトと変形したわけである。ムサ氏はまた、連山以南をウイガンとよび、渭干と記し、以北をムザトとよぶと。黄文弼が渭干と記したのはこれによっている。キジル千仏洞前の河はムザト、ク

トトラ窟前の河がウイガン、というのが実地におけるたしかな謂ということである。書物だけで実地を推すことはこのように地名さえ誤ることがあるわけで、こればかりにたよることはあぶない。



「アボリジニーたちと

動物園にいった」

細川 弘明

昨年（八六年）はほとんどの期間を豪州北西海岸のブルームで過ごした。この町は、戦前は真珠貝採取の基地としておおいに栄えたが、それが衰えた現在、代わりにこれといった産業もおこらず、町は観光開発に期待をかけている。観光といっても、美しい海（その美しさたるや、確かに「カリブ、愛の……」ばりのものではあるのだが）と岬の灯台のふもとにあるダイノザウルスの足跡（一億三千年前のホンマモンだそうです）と日本人墓地（真珠最盛期のブルームには四千人からの日本人がいて、現地に骨を埋めた方も七百人を超える）くらいしかスポットが無い。最近になって町はずれにできた「ワイルド・ライフ・パーク」は数少ない観光施設のひとつだ。

小生はこの小さな町でアボリジニー（豪州先住民）相手のフィールドワークをして暮らしていたのだが、六月の冬休み（南半球なので日本とは夏冬逆転します）を利用して女房と娘がキャンベラから遊びにやってきたとき、まあせめてもの家族サービスということで（動物園に行

こう、というのがそもそも都会育ちの日本人的発想ですが）このワイルド・ライフ・パークを訪れることにした。町から車をとばせば十五分かそこらで着く。このとき、ニジャリヤ叔母さんを連れていくことにした。彼女はヤウル系のアボリジニーで、小生は毎日のように彼女を訪れては部族の言葉や習慣について色々教わっていた。いわば現地での先生である。「動物園に行ったことある？」と聞くと、当然のことながら（というのは、動物園に限らず、観光スポットは「白人の領域」だからアボリジニーは足を踏み入れたがらない）「ない」という答え。じゃあ行こうよと、そう乗り気でもなさそうな彼女を引っ張りだした（彼女の娘やら姪やらもゾロゾロと付いて来たので、入園料がえらく嵩んだ）。ニジャリヤを連れ出したのは、動物見物のついでに、彼女らアボリジニーの動植物についての詳しい知識を聞きだしてやるう、という調査者としての魂胆も実はあったのである。

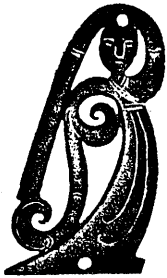
さて、門をくぐると最初は野鳥の部。ダレヤルという黒オウムが早速ニジャリヤの目にふれる。羽をあげると尾のところが赤いとか、キニーネ樹の果実を好み、よく食べに来るとか、ウンチクを傾けてくれる。うん、これは狙いがあたったな、と小生がほくそえんだのはここのま。他にも北キンバリー地方の極楽鳥の類やら水鳥やら結構そろっていて面白いのだが、ニジャリヤたちは、見

知った鳥がいないと分かると、さっさと歩き出す。「ディングはいないか？」とのこと。ディングは、豪州独特の野性イヌで、アボリジニーにとっては親しみの深い動物だ。学名もカニス・ディンゴというが、実は普通のイヌ（カニス・ファミリーリス）と同一種であるらしい。見かけは秋田犬が床屋に行ってきたような、何の変哲もないイヌである。そのディングを探しもとめてニジャリヤたちはドンドン先へ進んでしまう。僕は物珍しいものがあれば、いちいち立ち止まって眺めようとするのだが、彼女らはヤウルの土地にないものには興味を示さない。いきおい、ペースがまるで違ってしまふ。やがて行くと、大きな囲い込み^{エクロンジャ}があった。見物客は、中央にむけて長く突き出した棧橋のような台の上から疎開林を見おろす仕組になっている。囲いといってもかなり広いもので、動物はあまり見当たらないのだが、ニジャリヤの姪のひとりが目敏くバリジヤニンを発見。ワラビー（小型カンガルー）の一種で、ヤウルにとっては最も親しみある「肉」だ。アカシヤの木陰に数匹かたまつて昼寝。カンガルーの類はだいたい夜行性が薄暮性だから、屋間はあまり動かない。ニジャリヤたちは、そのバリジヤニンが雄か雌か、成獣かどうかなど、ひとしきり議論したが、品定めがすむと満足気にうなづいてさっさと棧橋をあとにする。ラクダとか水牛とか、はたまた（アフリカの）

駝鳥とかの囲いもあるのだが、ニジャリヤは見向きもしない。ひたすら「デインゴはいないか、デインゴはいないか」と先へ進む。だいたいアポリジニーというのは、普段は実にのんびりしていて中々動かない人たちなのだが、何か事があると別人のような素早さで動く。それは分かっていたつもりだが、しかし、動物園にきてその素早さが出るとは思いもよらなかった。結局、デインゴがないと分かると、何の未練もなく「さあ、帰ろう」。

女房と子供はあまりのベースの早さに不満気であった。ワイルド・ライフ・パーク巡りという（旅ともいえない）小さな旅を共にしながら、ニジャリヤ叔母さんらと僕らとでは、まるで異なる旅をしていたことに、遅巻きながら気がついた。僕らは「観光」だったのだが、彼女らは、なんのことはない、「国見」をしていたのである。（家族サービスと調査仕事とは両立しない、という単純な事実にも、あらためて思い当たった次第でありました。）

（八七年一月四日記）



「將軍」牌と Shrap 印

山 本 有 造

いずれ良い折を見てと思っていたのが瓢箪から駒のように段取りが弾んで、去年の夏、中国東北旅行が実現しました。北京―齊齊哈爾―長春―瀋陽―大連―北京と回り、大連―北京だけが飛行機でしたから、旧「満鉄」沿線の汽車旅もゆっくり楽しむことができました。

中国初旅で何が一番印象に残ったか。齊齊哈爾での一週間の学会をはさんでわずか二週間余の滞在では何が分るわけありませんが、中国はいま「消費ブーム」進行中というイメージを強く持ちました。もちろん北京では皆無に近かった人民帽・人民服が、齊齊哈爾ではごく普通といった地域差がありますが、食と衣については露店にも商店にも品物があふれているという印象をどの街でもうけました。電化製品はまだなかなか高価な様ですが、テレビがいまソフトもハードも熱烈歓迎されている様子にはむしろ驚ろかされました。

中国語のできぬ心細い一人旅の幸先がよかったのは、北京―齊齊哈爾二十三時間の汽車旅を、たまたまアジ研

・研究員のSさんと同道できたことでした。若くて美人で中国語に堪能なSさんは、硬臥車（二等寝台）に席をとったこともあって、たちまち車輦中の人気をあつめ、とくに青年達がとりかこんで一寸した王女様の風情でした。私も自分の軟臥車から移り住んで、おかげで彼らの職業や月給や結婚観や何やかやと聞くことができ大変愉快でした。ここでもテレビの話題の中心で、人気番組の「阿信^{あしん}」の行末から、テレビ・セットの品質まで質問ぜめに合いました。ついには自分のテレビの自慢話に花がさき、オレはソニーだ、オレは三菱だとやっているのは、丁度われわれのオーディオ・マニアの口論のようなものですが、そのうちの一人がほこらしげにオレのは「將軍」牌だ！ 三十分ぐらいしてようやく分りました。ゼネラル！

しかしこうした耐久消費材の大半は輸入にたよっているわけですから、今の消費ブームがつづくとなると外貨保有に問題が起らないのか。他人事ながら一寸気にかかります。

帰路の北京空港でのぞいたカウンターにシャープの小型電卓が陳列してある。あゝここまで、と思つてよく見ると、何とそれは Sharp 印。どこかの民営工場で作つたものなのか、香港モノでもあるのか。思えば日本もつい先だってまでそんなことをしていたのでした。



書いたもの一覽 一九六〇年二月〜一九六二年二月(五十音順) ●印は単行本

・赤松明彦

Stokartika, anunnia 章の研究(Ⅲ)(共訳)

インド思想研究 四号 一二月

古典インドにおけるコトバ論の展開 人文学報 六〇号 三月

・浅田彰

解説・クロソウスキー／ドゥルーズを読む

「バフォメット」 ペヨトル工房 一二月

●科学的方法とは何か(共著)

襲のトボロジ 中公新書 九月

プリゴジンスー躍動する生成の科学 現代詩手帖 一一月

●逃走論 現代思想 一二月

●GS・第4号(共編著) ちくま文庫 一二月

・浅原達郎 UPU 一二月

西周金文と暦 東方学報 五八冊 三月

・天野史郎 京大人文研 三月

ボードレール「悪の花」注釈(共筆)

・飛鳥井雅道 京大人文研 三月

大久保史学の論理性「大久保利謙歴史著作集」

第一巻・月報 吉川弘文館 一月

芦花の「罪」と気味悪さ「芦花日記」

第六巻 月報 筑摩書房 五月

思想の言葉 思想 五月号

ナショナリズムの諸相(海外視点・日本の歴史)明治

ぎょうせい 六月

「文学」他二九項目執筆「部落問題事典」

部落解放研究所 九月

●新修大津市史・第九巻・南部地域(共編) 日本歴史 一一月 別冊

謎の解明・ある米軍大尉の伝記

・荒井健 東方学報 五八冊 三月

李義山七律集釈稿(五)(共筆)

・井上章一 ザ・クラフト 一二月

流行舞踏会 座談会 関西を斬る(高田公理、上野千鶴子と)

演出された季節感・夏の女 地域研究交流 一二月

容 「現代日本文化における伝統と変

●近代日本産業技術の実態調査及びその発展過程に関する実証的

研究・I(共編) 産業技術記念物調査会 一二月

書評 梅棹忠夫・石毛直道編「近代日本の文明学」

民博通信 一月

書評 松山巖著「まぼろしのインテリア」

週刊読書人 一月二七日

書評 真杉高之「黒樺のドラマ・死亡広告物語」

週刊文春 二月六日

パリ博覧会日本館・一九三七——ジャポニズム、モダニズム、ポスト・モダニズム 吉田光邦編「万国博覧会の研究」

思文閣出版 二月

プロレス通信 三〇六

一心 TASUKE 二月〜三月

ラブホテルの戦後史

サンケイ新聞 三月二四日

農村回帰

朝日新聞 四月九日

●つくられた桂離宮神話

都市づくり

弘文堂 四月

キッチン、帝冠様式、批評家

「楽叢書・現代芸術のキーワード」

ド二〇〇

京都芸術短期大学 五月

書評 大林組編「復元と構想——歴史から未来へ——」

日経アーキテクチュア 六月

書評 赤瀬川原平他編「路上観察学入門」

読売新聞 六月二三日

パソコン少年

朝日新聞 七月五日

書評 「石子順造著作集」第一巻 キッチン論

週刊読書人 七月七日

書評 坂部恵著「和辻哲郎」

中央公論 七月

錦小路の「珍鳥居」

三洋化成ニュース 七月

秘境観光

朝日新聞 七月二六日

美人と禁欲

建築と社会 八月

美貌の力

文学界 九月

ゴミの反乱

朝日新聞 九月二〇日

しろうとしろうとの出会い

SPACE MODULATOR 一〇月

近代建築再考

建築雑誌 一〇月

世代差社会

朝日新聞 一一月一日

三島式の可能性

叻書月刊 一一月

万博遺跡——ホテル・ブルータル

三洋化成ニュース 一一月

ラブホテルの時代

現代風俗・八六 井上俊編「風俗の社会学」世界思想社 一一月

共同討議 世界の行方・上（上野千鶴子、奥野卓司、高田公理、野田正彰と）

朝日新聞 一一月二九日

ほんとうのデカダンス

室内 一一月

ポスト・モダニズムの下部構造

Voice 一二月

共同討議 世相の行方・下

朝日新聞 一二月六日

私の一九八六年

週刊読書人 一二月二三日

桂離宮の神話

京都新聞 一二月二四日

・岩見 宏

同朋舎 五月

●明代徭役制度の研究

・宇佐美 斉

同朋舎 五月

挽歌と夕日の氾濫

言語生活 一月

『ファニーとアレクサンデル』

映画新聞 一月

落日の坂

言語生活 三月

Le Problem de l'Ego chez Rimbaud

Zinbun No. 20 三月

ボードレール「悪の花」註釈（共筆）

多田道太郎編 共同研究報告 三月

『宿なしの女』

映画新聞 五月

『〇候爵夫人』

映画新聞 九月

・梅原 郁

梅原末治著「銅鐸の研究」あとがき

木耳社 十一月

Civil and Military Officials in the Sung: the Chi-ju-kuan

System ACTA ASIATICA 50 三月

南宋・元の中国

朝日新聞社「日本の歴史」 六月

●宋名臣言行録

講談社 九月

皇帝・祭祀・国都

中村賢二郎編『歴史のなかの都市』 一〇月

ミネルヴァ書房

京都大学人文科学研究所（東方部）の現況

東方学会報 51 十二月

・奥村 弘

●「赤穂市史」第三巻近現代編（共同執筆）

十二月

三新法体制の歴史的的位置—国家の地域編成をめぐる—

日本史研究 二九〇号 一〇月

●赤穂市史年表（共編）

「赤穂市史」第七巻 一〇月

・桑山 正道

トハースターンのエフタル、テュルクとその城邑

日本オリエント学会編「三笠宮殿下古稀記念オリエント学論集」小学館 十二月

Japanese Studies on Archaeology Overseas 1973-1983

The Centre for East Asian Cultural Studies 十二月

ガンダーラ美術と遊牧族（五）

オリエント通信 二四号 七月

竹林寺塔記序—ストゥーパと仏像— 真鍋利光「竹林寺塔記—

五重塔再建の記録と塔の源流」 竹林寺五重塔保存委員会 一〇月

五重塔再建の記録と塔の源流」

竹林寺五重塔保存委員会 一〇月

・小南 一郎

楚辞の時間意識—九歌から離騷へ— 東方学報 五八冊 三月

漢代画像の世界 天理参考館図録「ひとものこころ」 三巻 七月

・阪上 孝

論点 88 読売新聞夕刊 一、二、七、八、十月

シンポジウム・家と家族 「国際研究」 六月

・佐々木 克

県令籠手田安定の更迭 季報 大津市史 三四 十二月

大久保利謙歴史著作集I「明治維新の政治過程」（編・解説） 吉川弘文館 二月

大久保先生と私 同右付録 二月

自由民権運動「大阪社会労働運動史」第一卷

二月

明治維新と草津「草津市史」第三卷

三月

維新の挙兵と近江

湖国と文化

三五号

四月

琵琶湖疏水の政治的背景

滋賀近代史研究

二号

六月

書評・遠矢浩規「利通暗殺」行人社 週刊読書人

九月八日号

新修天津市史第九卷（共同執筆）

大津市 十一月

鶴ヶ城落城す「ザ・会津 戊辰戦争への旅」

読売新聞社

一二月

明治初年の区・戸長

草津市「道しるべ」二八号

一二月

・佐原康夫

春秋戦国時代の城郭について

古史春秋

三号

八月

・甚野尚志

十二世紀ルネサンスへの視角

創文

五月

●カノッサのマティルダ伝（共訳）

岩波書店

一〇月

ケルンにおける都市共同体の成立

中村賢二郎編『歴史のなかの都市』

ミネルヴァ書房

一〇月

・曾布川寛

秦始皇陵と兵馬俑に関する試論

東方学報

京都五八冊

三月

林泉高致、早春図よりみた郭熙の山水様式

「アジアにおける山水表現について」

国際文化交流美術史研究会

五月

・竹内実

北京「反日」デモ

●現代中国への視点

中国の新聞の読み方

中国に吹く「不正の風」

「左」の批評

日本企業の広告

中国の犯罪

天皇の訪中

●魯迅全集 書簡Ⅲ

犯罪・諺・水

黄山夢幻

杉良太郎の中国公演

七夕と戦争の記録

中国の都市と人口

中国文壇の新感覚派

周年記念の重なる中国

喫茶史話

毛沢東死後十周年

日中の大学進学者数

長征年表「長征の道」

公表数字・政策を見抜く目

京都新聞 十二月二日

日本放送出版協会 一月

中国情報 一月号

京都新聞 一月二十三日

中国情報 二月号

中国情報 三月号

京都新聞 三月二十日

中国情報 四月号

THE KIRIN キリンビール 四月

学研 五月

中国情報 五月号

京都新聞 五月十九日

中国情報 六月号

中国情報 七月号

京都市政調査会報 七月

中国新聞 七月九日

中国情報 八月号

「中国の旅」講談社 八月

京都新聞 八月二十六日

中国情報 九月号

日本放送出版協会 九月

中国情報 十月号

魯迅の「阿Q正伝」

文革とはなにか?

歴史のなかの毛沢東

「阿Q正伝」解説

やくざと浮浪児

中国の変貌―「公式」につちて

上海の髪形

「転形期」の精神―「墮落論」と「情欲論」

谷崎潤一郎と中国

・多田 道太郎

●ボードレール「悪の花」註釈 上巻 (共同研究)

京都大学人文科学研究所 三月

●対談―変貌する日本人 (共著)

危ないのはむしろ東京やね (対談)

三省堂 九月

●近代日本の「家」と文学 (家庭の本質)

放送大学教育振興会 三月

悔恨としての現在と永遠

世界思想 春号

●ある時代映画のイロニー (講座日本映画③トーキーの時代)

岩波書店 三月

浮上する「からだの時代」 (講演録)

ライフサイエンス vol. 13 六月

築山の中の生と死

一心 TASUKE 六月号

香りの奥にひそむもの

あすあすあす 七月号

京都新聞 十月十七日

東方 十月号

中央公論 十月号

岩波書店 十月

中国情報 十一月号

中国情報 十二月号

京都新聞 十二月

東亜 十二月号

さろん日本文化 17 十二月

詩人と学者と

ひょんと死ぬる

名数と日本文化 (対談)

死者との出会い

死の姿勢

●しぐさの日仏比較 (海外広報文庫①フランス)

フランス的ということ

The Destiny of Samurai Films

EAST-WEST FILM JOURNAL 一二月

・田中 淡

周原建築遺址の解釈 (山田慶児編「新発現中国科学史資料の研究

究 論考篇」)

京大人文研 一二月

古代中国の狩猟について (「日本民族文化の源流 比較シンポ

ジウム・Ⅶ・狩りと漁撈」梗概) 国立民族学博物館 二月

中国の穴居の伝説 日中建築 二〇号 三月

十字路の報時楼閣

横山正編「時計塔―都市の時を刻む」 鹿島出版会 四月

図版解説・大仏様建築

週刊朝日百科・日本の歴史 四号 朝日新聞社 五月

講演要旨・中国建築からみた寝殿造

建築雑誌 七月号

●中国建築史の基礎的研究 東京大学学位請求論文 一一月

書評・中国科学院自然科学史研究所主編「中国古代建築技術

史」

東方 六九号 一二月

あすあすあす 八月号

あすあすあす 九月号

淡交 九月号

あすあすあす 一一月号

あすあすあす 一二月号

あすあすあす 一二月号

太陽 一二月号

・谷 泰

「族的結合と社会的機能」ディスカッション・コメント、『シンポジウム 中近東・イスラーム社会における族的結合』

中近東文化センター研究報告 六号 一月

揺籃の民族誌 『新しい子供学』 三巻 海鳴社 五月

・礪波 護

唐代食実封制再考(唐代史研究会編「律令制」)

汲古書院 二月

●唐代政治社会史研究

陽平王妃李氏墓誌ほか(「中国書道全集」第二巻) 同朋舎 二月

●一二五〇年の世界(日本の歴史・一一・共編)

朝日新聞社 六月

●一五〇〇年の世界(日本の歴史・一二・共編)

朝日新聞社 九月

宮崎市定「中国に学ぶ」(中公文庫)解説 中央公論社 九月

関道愛墓誌ほか(「中国書道全集」第三巻) 平凡社 一〇月

●一六〇〇年の世界(日本の歴史・三三・共編)

朝日新聞社 十一月

・富永茂樹

●ルネ・ジラル「身代りの山羊」(共訳)

法政大学出版局 一二月

自己保存装置としての日記 Graphicaion, no. 23 二月

文化の中のメランコリー

京都大学学生懇話室紀要 第一五輯 三月

論点・八六(上) 読売新聞 五月三〇日

論点・八六(下) 読売新聞 六月二七日

狂気の閉じ込めと監視

作田・井上編「命題コレクション 社会学 筑摩書房 六月

自由と平等の非両立性 同前

アンリ・ルフェーブル「無意識についての社会学的モデル」

(翻訳) アンリ・エー編「無意識・V」(大橋博司監訳)

金剛出版 九月

催眠と模倣―群衆論の地平で 思想 一二月号

論点・八六(下) 読売新聞 一一月二八日

論点・八六(下) 読売新聞 一二月二六日

・中村賢二郎

●歴史のなかの都市(編著) ミネルヴァ書房 一〇月

・羽賀祥二

領知権の解体と「民政」 日本史研究 二九〇号

・狭間直樹

書評・佐久間東山著「袁世凱伝」

中国研究月報 第四五〇号 (八五年) 八月

「学振」訪筆記

中国研究月報 四五一号 九月

最近の日本における五四運動研究 中国研究月報 四五二号 一〇月

孫文の意義を求めて―神戸での日中シンポジウムから

朝日新聞夕刊 一月一八日

中国の西南地方を訪ねて 東方 第六〇～六五号 三月～八月

孫文思想における民主と独裁 東方学報 五八冊 三月

中国人による「民約訳解」の重刊をめぐる

「中江兆民全集」別巻月報 四月

現代中国の実像 37・近代史の再検討 孫文

読売新聞夕刊 六月二一日

民主主義研究在日本（孫中山研究学会編）「回顧と展望―国内外

孫中山研究述評」中華書局

七月

中川恒次郎報告孫中山革命活動的信（共訳）

歴史檔案 第二三期 八月

・林 巳奈夫

殷墟婦好墓出土の玉器若干に対する注釈

東方学報 五八冊 三月

神なる虎豹と人間形鬼神

泉屋博古館紀要 第三卷 三月

●殷周時代青銅器紋様の研究―殷周青銅器総覧二―

吉川弘文館 一一月

・樋口 謹一

寛容社会をめざして 日高六郎・榎本貴志雄編「二世紀への

進路」

シネルヴァ書房 二月

国際平和年にあたって 「平和と民主主義」四五六号 三月

●ルソー「エミール」上・中・下（翻訳）

白水社 一〇月

・平田 由美

会話文と地の文―文学テクストにおける表現と表記―

人文学報 五九号 二月

文章道経営惨澹―露伴の明治三十年― 文学 八月号

・藤井 譲治

江戸幕府老中制の形成(1)

人文学報 五九号 二月

●木津町史史料編Ⅱ（共編）

日本近世社会における官僚と軍隊

木津町 二月

・古屋 哲夫

形成期における領事制度と領事報告

「統治機構と文明学」 中央公論社 六月

角山栄編「日本領事報告の研究」 同文館 一二月

資料編

同右 一二月

・前川 和也

Cultivation of legumes and mung-bean plants in Ur III Girsu,

Bulletin on Sumerian Agriculture II(1985),

Cambridge Univ. Press, England.

The Agricultural Texts of Ur III Lagash of the British

Museum III, *Acta Sumerologica* 8(1986), The Middle

Eastern Culture Center in Japan.

Two Ur III tablets in the British Collections, *Acta*

Sumerologica 8(1986).

・宮崎 法子

作品解説七点 静岡県立美術館開館記念特別展図録

「東西の風景画」 四月

宋代仏画史に於ける清凉寺十六羅漢像の位置

東方学報 五八冊 三月

・ 菱谷 邦 夫

書評・中嶋隆蔵「六朝思想の研究」

集刊東洋学 五六号 一月

・ 山下 正 男

動・植物名と「大漢和」(紀田順一郎編「大漢和」を読む)

大修館 三月

● 京都市内およびその近辺の中世城郭

京大人文研 三月

三位一体論の構造論的・イコノロジー的研究

人文学報 六〇号 五月

・ 山田 慶 兒

● 新發現中国科学史資料の研究・論考篇(編著)

京大人文研 八五年一二月

● 科学の前哨(ジ・ニードム著、共訳)

平凡社 八六年三月

● 日本技術の原型(朝日週刊百科・日本の歴史三八、編著)

朝日新聞社 一二月

・ 山 本 有 造

金銀本位制論―「貨幣法」成立以前史―

人文学報 五九号 二月

太平洋戦争下「満州国」経済の概観―工業化問題を中心に―

「中国東北地方経済に関する調査研究報告書」

(財)産業研究所・アジア経済研究所 三月

国民政府統治下における東北経済―一九四六―一九四八―

同右 三月

書評・小野二郎編「戦間期の日本帝国主義」

社会経済史学 五二巻四号 一月

英領海峡植民地における円銀流通とその終焉

角山栄編「日本領事報告の研究」 同文館 十二月

・ 山 室 信 一

どの国に学ぶか「海外視点・日本の歴史 一三巻」

「和魂洋才の日々」 ぎょうせい 六月

歴史における保守と進歩 中央評論 三八巻二号 六月

● 編集、解題「明治期学術・言論雑誌集成」 ナダ書房 六月

・ 横 山 俊 夫

● 京都大学人文科学研究所蔵 日本関係欧文図書総覧 一九五〇

年以前刊行文 京大人文研 三月

The Importance of Japanese Studies in Britain for Future

International Relations in the Asia-Pacific Region, *NIRA*

International Conference Report Series, 3 四月

Book review/ *Dr Willis in Japan, 1862-1877, British*

Medical Pioneer by Hugh Cortazzi(London: Athlone

Press, 1985), *Japan Quarterly*, Vol. xxxiii, No. 3

七一九月

政事都市の肖像―前近代日本のばあい―

中村賢二郎編「歴史のなかの都市」

ミネルヴァ書房 一〇月

コメント・シンポジウム―高度情報社会と日本文明

比較文明2 比較文明学会 一〇月

・吉川 忠 夫

西安碑林の「淳化閣帖」

出版ダイジェスト 一二月一日
中外日報 一月七日

師弟の説

書と道教の周辺(六)～(八)

●秦の始皇帝

●魏晉清談集

「官奴帖」と道教思想

●漢書五行志(共訳)

祭祀と天馬の歌

京都新聞 一月一四日

書道芸術 一、三、五月号

集英社 七月

講談社 七月

墨 六一号 七月

平凡社 九月

馬銜 三六号 九月

人

文

第三号

一九八七年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷株式会社

非売品